

1 目的

(1) キクの生産性向上技術の検討

高齢化や後継者不在等により、生産者数が減少傾向にある。枕崎市大塚花き団地では、長年、白輪ギクの生産が盛んであったが、コロナ禍で業務用に使われる輪ギク需要が減少し、また、燃油や肥料などの生産コストの上昇が続いている。花きの消費動向では、量販店での50～60cmのパック花の需要が、増加している。そこでパック花加工業者のニーズにあったスマートフラワー（短茎キク栽培：規格70cm）の検討を行った。

持続的で新しいキク切り花経営(SDGs)に向けて、新たな生産体系、販売価格、選別基準（生産コスト、輸送コスト削減、新たな販売チャンネルの開拓）の検討も併せて取り組む必要があった。

また、LEDと加湿恒温庫利用によるキク苗の発根促進技術により、育苗期間を短縮できる可能性があったため併せて効果確認を行った。

2 実施状況

(1)大塚周年菊研究会活動内容

当研究会員は現在20～40代までの若き生産者10名で、テーマを決めて毎月の定例会及び現地検討会を行っています。

(2)スマートフラワー検討、実証ほの実施

慣行栽培の作式とスマートフラワー栽培の作式で実証ほを設けて生育、収穫調査を行った。スマートフラワー栽培は慣行栽培に比べて1.4倍の栽植本数であった。また、パック花需要は、MSサイズの要望が高い。収穫時の規格別本数割合は慣行区に比べてSF区のMS率は高く、55%であった。慣行区は業務用向けサイズの2L以上が高く80%であった。また、合計の売上げは、スマートフラワー栽培が慣行栽培に比べて468千円/10a高かった。

パック花加工業者のニーズにあったスマートフラワーの検討を行った。また、実需者とマッチングをはかりながら、新たな生産体系の目処がたった。

(3)LED及びびを活用した育苗技術の実践

発根苗に比べて生育ムラがなく、直挿し並みにほ場での揃いが良い。また、直挿しに比べて活着までの期間が短く、直挿しに比べて半分以下の期間で活着する。時期別・品種別で穂の腐敗が多く発生していた。時期別・品種別で温度、湿度条件を変えることで腐敗がなくなり、成苗率が向上した。

スマホによる育苗庫の管理をすることで、無駄なく回転率をあげる事が可能となった。

3 今後の課題、取り組み

- (1)年間を通したスマートフラワー栽培体系の検討
- (2)LED 恒温庫利用育苗技術の活用及び波及



写真1 スマートフラワー現地検討の様子



写真2 スマートフラワー室内検討の様子



写真3 LED 恒温庫利用育苗技術の検討